

関西から全国へ人形浄瑠璃街道

評論家 文化プロデューサー 夙川学院短期大学教授

人形浄瑠璃街道連絡協議会顧問 河内厚郎

いつぞや外国の使節団が来日した折、人形浄瑠璃（文楽）と家電メーカーの工場を見学してもらった。ホストの側としては、古典芸能と先端産業―伝統とハイテク―新旧対照の「日本」を見せたつもりが、「劇場でも工場でも精巧な人形」を見学したのが印象的だった」という感想を使節団は述べていた。ロボカップ2005大阪世界大会でも大阪大学が企業と共同開発した「女子アナロボ」が話題を呼んだが、ロボットに「百恵ちゃん」という愛称をつけたりして親しむ独特のアニミズム（？）感覚は、どうやら日本文化の奥深いところに根ざしているらしい。

昔から私たちの祖先は擬人化されたヒトガタを作るのを得意としてきた。人形（ヒトガタ）に魂（アニマ）を吹き込み鉄腕アトムというロボットの主人公を産みだした、そんな国柄だから、江戸時代、人間まがいのヒトガタが生身の役者を追いやつて主役に躍り出た時代があったのも驚くことではない。

近世の人形劇が大人の鑑賞するものとして発達したのは、何といつても、近松門左衛門（一六五三―一七二四）と竹本義太夫（一六五一―一七二四）のコンビによって確立された、人形浄

瑠璃のドラマとしての成熟度が抜群に高かったからである。それらは続々と人間の役者が演じる歌舞伎へも移されて、『仮名手本忠臣蔵』（一七四八・人形浄瑠璃、一七四九 歌舞伎）などの国民劇が巣立っていく。それは今日のNHK大河ドラマのような存在であった。

私の生まれ育った兵庫県西宮市は、中世の昔、「傀儡師」と呼ばれた人形遣いたちが住んだ町で（今も人間国宝の吉田文雀丈が健在である）、人形芝居の祖神「百太夫」をまつてきた（私は長年「百太夫広場」の建設を提唱している）。そんな人形操りの芸能に、三味線を伴奏に語る浄瑠璃が結びついて、淡路・阿波の人形浄瑠璃や、大阪の文楽へと発展していったのだが、人形の操作方法は、三人遣いはもとより、一人遣いや糸操り、車人形など地域ごとに多彩なバリエーションがあり、全体として豊かな人形文化圏を形成している。

そんな人形浄瑠璃やまた歌舞伎の伴奏に、十六世紀に大阪湾岸へ渡来した三味線音楽は不可欠となり、ドラマの進行を決定するほどの役割を担うことになった。それは、竹本義太夫の創始した義太夫節が人形浄瑠璃の流行により非常に発達をとげ、歌舞伎の中へも移入されて主



長老越節義之誉（和知人形浄瑠璃・京都府）
京都で人形操りと語り、三味線が一体となり新たな総合芸術が誕生した。
大型の人形を一人で操る「一人遣い」が和知の特徴である。

要なレパートリーとなったからである。義太夫節で語る人形浄瑠璃で初演された作品が歌舞伎の主演目ともなったのだ。

赤穂浪士の討ち入りという巷の重大事件を「忠臣蔵」という国民的ドラマにまで仕立てたのは浄瑠璃作者たちであったが、それにしても、なぜ浄瑠璃という語り芸が、そこまで大きな役割を果たしたのだろうか？

江戸時代、鎖国下の日本からはからずも帝政ロシアへ渡った、大黒屋光太夫や高田屋嘉兵衛といった人々は、船中に浄瑠璃本を携えていたことが判明している。嘉兵衛の場合は近松門左衛門の『曾根崎心中』であったが、こうした史実は、浄瑠璃が単に芸能というにとどまらず、近世町人社会の共通言語だったことを物語る。浄瑠璃言葉は十八〜十九世紀の日本人の共通文化となり、関西から全国津々浦々へ伝播していったのである。

東日本大震災を機に日本国籍を取得したドナルド・キーンさんの記念館が、新潟県柏崎市にできるといふ。二〇〇七年の中越沖地震後、被災者を励まそうと同市が舞台となる浄瑠璃を三百年ぶりに復活公演すること
演すること
をキーンさんが提案し、
実現したのがきっかけだ。この国の基層には人形浄瑠璃の文化が脈々と生き続けている。



地神さんに式三番叟奉納（勝浦座・徳島県）



絵本太功記 初菊（淡路人形座 兵庫県）



武智光秀（淡路人形座）



犬飼農村舞台公演（徳島県）